

褪せない 層を重ねて



文 橋本 麻里

江戸時代の浮世絵制作の常識を、あらゆる側面から打ち破った革新的な版画家、吉田博。彼の創造的な精神は、ふたりの息子へ、さらには孫へと、世代を越えて受け継がれた。そしてその一人ひとりが、ほかの誰とも違う独自の解釈を作品のなかに落とし込み、芸術家としての表現に活かしている。



筆者の住む神奈川県逗子市には小さな海岸があり、空気が澄んでいれば波の向こうに富士山を望むことができる。快晴の朝は葛飾北斎「神奈川沖浪裏」そのものの風景だが、日没の光が山から海へ美しいグラデーションを描く夕暮れは、北斎の約100年後に生まれた吉田博（1876〜1950年）の木版画の色合いを連想させる。

江戸時代中期の日本で花開いた浮世絵（多色摺木版画）は、版元のプロデュースに基づいて、絵師・彫師・摺師が分業で制作にあたった。その技術は江戸時代末期に頂点を極めたが、明治時代に入って、銅版画や石版画など新しい技術の台頭、そして分業制ゆえの作家性の希薄さなどを理由として、衰退していく。その一方で、欧米からの浮世絵の引き合いは増えていた。これに呼応し、江戸時代の浮世絵とは異なる、新しい時代の日本にふさわしい、新しい木版画の創出を求めた版元、画家たちによって試みられたのが、後に「新版画」と呼ばれるようになったジャンルの作品だ。

江戸以来の分業システムを生かしつつ、近代的な作家性の確立も目指した新版画の画家のなかでも、とりわけユニークな活動で知られるのが吉田博である。そして博の妻、ふじを（1887〜

1987年）、博とふじをの息子、遠志（1911〜1995年）、穂高（1926〜1995年）、穂高の妻、千鶴子（1924〜2017年）、穂高と千鶴子の娘、亜世美（1958年〜）まで、3世代にわたってそれぞれ高い評価を受ける画家を輩出し続けてきた、きわめて珍しい「家系」でもある。

幼少期から絵を好んだ博は、中学校の図画教師をしていた吉田嘉三郎（1861〜1894年）に画才を見込まれ、15歳で吉田家の養子となった。博は西洋絵画を志して18歳で上京。水彩画を中心に作品制作に励み、23歳の時に友人の画家とふたり、わずかな資金と作品を抱えてアメリカ渡航を企てる。国内外の協力者たちの力も借りて、1899年にデトロイト美術館で二人展の開催に漕ぎ着けた。さらにこの売り上げを元手にヨーロッパへも足を延ばし、イギリス、フランス、スイス、イタリアを巡り、再びアメリカの地を踏んでから帰国する。

以後も博は、長期にわたる世界旅行へ繰り返し出かけた。行く先々で未知の風景を眺め、スケッチし、作品として描き上げ、展示し、販売するところまでを自らでやり遂げてしまう。なんと恐るべき行動力ではないか。2度目の世界旅行には、やはり絵を学んでいた

「前ページ」
吉田博は、作品の題材となる風景を求めて世界中を旅した。1930年には、長男の遠志と共にインドと東南アジアをめくった。「タジマハルの朝霧第五」では、14の版木を用い、55版もの摺りを重ね、複雑な色調を表現した。
[当ページ]
吉田博の「八甲田山睡蓮沼」（1929年制作）。この作品では、秋の紅葉を描くために12以上の版木を用い、35版以上の摺りを重ねた。
[次ページ]
「マタホルン山」（1925年制作）では、昼と夜の2種類のバージョンが制作された。左下には、自筆のサインと赤いエーテルワイスの花の刻印が見られる。



【当見開きページ】
1972年以降、吉田遠志は、旅先で目にした野生動物を題材とした自然主義的な版画制作へと傾倒していった。(左上) 1977年の作品「ゼントウペンギン」は、彼の南極訪問の経験をもとに制作。(下)「トムソンガゼル」(1972年制作)では、ふたつの版で平行線を重ねることで疾走感を出している。(右上) 1987年の作品「黒ひょう」からは「静寂」と「緊張力」が感じられる。このふたつの要素は、遠志の作品にしばしば見られる特性であると、吉田家について研究していた学者のユージン・スキップは述べている。



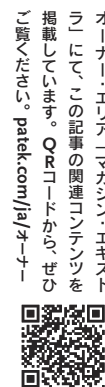
15歳の義妹を伴った。博はまずアメリカ各地で水彩画の兄妹展を成功させた後、ヨーロッパと北アフリカ各国を3年にわたって旅している。この義妹が後に妻となる、ふじをであった。こうして風景を専門とする水彩、油彩の画家としてキャリアを重ねてきた博が、木版画を本格的に手がけるようになるのは、49歳になってからのこと。それ以前から博は、新版画を手がける版元からの依頼で、木版画の制作にも関わっている。だが依頼仕事では、何もかも思う通りに、とはいかない。若い頃から「絵の鬼」と異名をとった完璧主義の博は、木版の彫り、摺りの高度な技術を習得する一方、彫師、摺師の職人をアトリエに抱え、細部にわたる徹底的な指示・監督の下、時に自らも彫り・摺りに加わりながら、版元に頼らない私家版木版画の制作に乗り出したのだ。

遠志・穂高の兄弟も、父と共に世界中を旅してきた。長男の遠志が特に惹きつけられたのは動物で、顕微鏡でやつとその形をとらえられる微生物から、アフリカの大地を疾走するチーター、ゾウの群れなどの野生動物までを、卓越した観察眼でとらえ、表現した。遠志が晩年に心血を注ぎ、ヨーロッパでも高い評価を受けた「動物絵本」シリーズを通して、その絵に息を呑んだ記憶を持つ人も少なくないだろう。

一方、穂高は、油彩や短歌から創作の道に入り、兄と共に旅した中米でマヤ文明の遺跡に強い衝撃を受け、原始美術から着想を得た抽象木版画を制作の中心とするようになる。そして吉田家の現役作家、亜世美は、大学で建築史を専攻し、留学先のアメリカで初めてシルクスクリーンに触れ、版画に興味を持ったという変わり種だ。現在は、アメリカやヨーロッパを中心に、版画技法を含むインスタレーション作品を発表している。「生前の祖父に会ったことはありませんが、あの色の重なりをどう計算していたのか、あれほど完璧な版画をどうつくったのかと、作品を見るたびに驚かされます」と亜世美は話す。

芸術への情熱と技術への敬意を積み重ねながら、一人ひとり独立した画風を確立する。畏敬すべき一族の歴史もまた、大河小説のごとき魅力に満ちているのである。

PHOTOGRAPHS: FUKUOKA ART MUSEUM/DNPARTCOM



オーナー: エリアマガジン・エスト
ラにてこの記事の関連コンテンツを
掲載しています。QRコードからぜひ
ご覧ください。 patek.com/ja/オーナー

芸術への情熱と技術への敬意を積み重ねながら、一人ひとは独立した画風を確立する。畏敬すべき一族の歴史もまた、大河小説のごとき魅力に満ちているのである。



